



結題百首聞書

藤川百首注
宗長・兼哉・宗碩聞書

伊地知文庫
文庫20
275



古川
藏書



結題百首

廿題ハ号雜歌在ハコテ結題ニハ文字歌ニシテ
レ百首ト執堪少クシテヨリヨリ讀進作

伊地知



宗長公上書
五ノ廿の初ノ下ナリ
亦ハ其の考一ナシ
後漢

関路早春

棘路ハハルレノ
夏コトハカクハハ
春ヨシセトハハ
時ヨリハハ
友氏ハレハ
乃ハ
関路ハハルレノ
夏コトハカクハハ
春ヨシセトハハ
時ヨリハハ
友氏ハレハ
乃ハ
乃ハ
乃ハ
乃ハ
乃ハ
乃ハ
乃ハ
乃ハ
乃ハ
乃ハ

こゝれはいつくゞの作りの一首首文歴元年が家
以信より万代にふはらんをりしりとも家ふて
無曲とむとひは後也友河定家知以依勅勅
子に不入と況是又子能実法おとせよこの世に
讀みふより曲秋の詞に如流とも名も御代と
わさし〜とてはつる

湖上朝霞

朝霞乃方史可也此入主霞元初と志家の詞
世秋の境に別して湖水と流も流下とて大海
何とてもの志家は海乃つふよとちもつと
霞立たらるとなり吹風ものつれくえと吹く

元やひきととハ
やとをいふ
つり兼十日
諸君とよ寄
百あり

霞立のつり足も下る連懐か下とて又云
湖乃見方ちや霞の如く流下とて大海乃
吹く〜と流下を眺る限り

旅満遠樹

三輪の山まの里とてし初を河いふあひえん三輪松
初流河古河野鳥とて二本有松年をたぐふあひ
えん二本あ内松 三輪の山いふ詩はんのみ
尋ねた人もわ〜とちりてはあそと切新
とる二本乃校数屋とていふあひえんとて
侍里旅人の恋の心を志家より又云三輪乃山ハ
人とてすの支に昔より流下とてすの山ハ

いふあひえんハ
秋の事し
長兼曰

ふりし可見や旅うまの語てもり里よりんを
二本の枝といふらんあふり第あめ二本乃
枝のしきりあひらん後分りき樹の痛
初決し先里産と云伝を不ら均先里うとひ
詞を年あれ

霧中肉嘗

おとくき山をり快かり衣啼祢可く父乃嘗
後撰上逢事なき山をりのかり衣きてハ
可き社とのき形元良親五霧中と云言
旅のしき女のいしよりし可き旅のしき
可き山と云つるき山をりとはき山身あり

長云り衣た
りり衣ころめ
得のき木ま
を
兼云山と云
より谷と所い
り

衣子のぬせよりり衣のまをり
くこの風あり又云おん遠よりし便より
そのしきり山函谷はなは嘗と云のき
何しき山面白とあり

隣家竹嘗

山賊の園せふき輝るはるし竹ふふい嘗
毒花見よんをりし嘗はむしき
しと云と云と云し我竹ふい
んをりしと云と云と云し

田家乃菜

山田水は海ありしはるし竹ふふい

公明
長月

長云津のちれい
りりりりりりり
休つていりりり
りりりりりりり
りりりりりりり
りりりりりりり
りりりりりりり

山田をよのまをみりてしゆいさゝくしゆり
しゆく神かんふまは乃神こふ云神春は若菜
の神有り前かたりん若菜可有其奥

野外残雪

春日野の若菜は云の神
貫之神、春日野の若菜は云の神
神妙、云人の神、神の神、
若菜は云の神、野守をみよま
赤人かきあま字の神、海は云の神
春日野の神、神の神、若菜は云の神
云てしゆの神、神の神、神の神

長きまは、
言つた、
神の神、
神の神、
神の神、

人のて版面白歌なり糸の字ん塵乃いふと

余信也江上の字もおれ

山路梅花

色も香もあつてハ、
梅花は白春屋ハ、
有きぬの字とて、
香もあつた、
香もあつた、
香もあつた、
香もあつた、
香もあつた、

香もあつた、
香もあつた、

無んがる能もつあひ儀あり

梅薫秋栂

白ひあけ栂よさしし梅香公よ毎夜の星は光
里栂よ秋よしきし淡家や唯今月少くむ
るの栂ひあけ梅の香にいふも星をそよふ栂
敷の空ありま化河さうかよ晴く星よあけ
心ちあけあけ反晴く星河さうかよ晴く星よあけ
あけ栂也又云園天栂及よ栂の白ひあけ
雲さの星あり栂よ栂るふより毎くさう
せり

水邊古柳

長い世物とて
水が川面のみ
みまうとて
第一日

年月も栂よさしし柳を水が河の末の春
伊勢物語よ水が河のふとてまんとしし栂と
さうて栂さう今案社栂八栂也像成
八栂よさしし栂とさうまんとしし栂と
く栂とさしし栂よ水が河のふとて古柳とさ
さうて年月の栂さうさうさう水が河の
末のよの春と栂さう又年月の栂さう
り栂のさうさうさうさう又云八栂と栂
さうさうさうさうさう又栂のさうさう

雨申侍花

染より本栂さしす栂花歌のさうさう春夜

白ひあけ栂よ
さしし梅香
公よ毎夜の
星は光

河上春月

春乃夜の八聲
長云夜の八聲
感りいとし
うんとう
うんとう

河上春月
行雲流るる道にて
志はけりし乃今と
心得てしなま
心はけりし乃今と
志はけりし乃今と
心得てしなま
心はけりし乃今と
志はけりし乃今と

春乃夜の八聲

長云夜の八聲
感りいとし
うんとう
うんとう

春乃夜の八聲
長云夜の八聲
感りいとし
うんとう
うんとう

友花随月

長云友花
友花
友花
友花

友花随月
長云友花
友花
友花
友花

橋邊 歎又

長云橋邊
橋邊
橋邊
橋邊

橋邊 歎又
長云橋邊
橋邊
橋邊
橋邊

如くいへばしつらら
の程まうとては
いふも手紙
兼て月

るゝの梅は根源の山吹の色よかく昔のいひ
言葉とちりてりりるを物なり

船中暮春

兼て月
兼て月

昔のいひとては
を誰かの野らんとて
誰か我がとて
吾れ人りやあると
畫乃のいひとては
春は行くさうなり

卯花隠路

卯花乃枝もぬれ
兼平小野へ
兼て月

長云春はたか
よころとては
いふも手紙
兼て月

その何者とかいふ
此本を
我れ人りやあると
卯花とては
之の也
泣涼詞
ア小野
おのり
い
兼て月

何志歌述言語歌や

初関郭云

きのんは辰五の時鳥又折るゆき古声

子色よりしつめまた又五月待山軒

羽母は比友首中てきそら道しりし去年は煙

色とくいつきもかいつつかひんあり又云

此方しん平と書し春を辰辰月乃ふと云

きり

山家郭云

比里は待しすいしは馬山といふははきと云れ

いつし漸し山里はきりしはありのふり

音はもをいしはあつとから漢(あ)

待れ又待れ
比にまといん
夏はけきん
きりし造作
甲ん下り

長息曰

池朝高蒲

きりより月あを池水よとのうきと云れ

比類しんあまよくあり音のしあをきり

池水よこの所ん也との五月さついつく

比類あうりかひらぬ牛小川うり

奇特よ云々

閑后救火

このりし物よりし時うぬ行乃事んは奥のり火

所うぬんは根よのきこまう家指らあり

神反りありありぬきゆけうめい

付まこのかたよま竹を不度あり

竹はらと燃え
救まゆけ
長息曰

人の情もなつかぬれから後ろこ又云五文字
思ひ入る可也

盧播驚夢

袖乃書て札をたし積しと強くはしむるに夢は待
月如けく夢に別向するを覚めて難氣^{つら}居らん
云と取く後ろこ見らん神の書に橋と夢し
夢を言らるるに又云ててててて
いんあり可也師説

杜五月雨

後人けはれぬありて有ぬ世にたぬ衣の衣
よも人のこころをたぬのはあつ法なく乃

夢をふらむ
みはれ人の
神のまこと
のまこと

身をこもる五月雨なりとていん海きりまに
後成身よおけつれつう勝つ後人めつらん
五月夜の足はんとるか(可也)

野々草草

わし歸りてとていん葉たに花をくらき成ゆら
思ふにらるる誰れよの身とていん後ろこ
枯るるをさるるに花をくらき成ゆら
わし歸りてとていん葉たに花をくらき成ゆら
けし何れとていん誰れよの身とていん後ろこ
夢をたれり

洞窟螢火

とていん葉た
花をくらき成
ゆら
けし何れとて
いん誰れよの
身とていん後
ろこ

うらやのままといくり六花の林と
りきり地んく叶了又詩上狂雲如佳月
可のんもく又玄お奇のは乃花を秋より
きりといふ不反のくまうじ専しとんぬ
この言氣のりりりきとさういひてハ月と
と可おといふうもんをなして見たり又
おとさういふたやわりのこつ言氣の言語
及びなりと月しとらとちししとんぬ
かえんこおれとよこ

松間取月

袖をみせりみり松風はゆきなる月をすまふ

長云
松風はゆきなる月をすまふ
袖をみせりみり松風はゆきなる月をすまふ

あひおあひて物をみたり松袖よの言とさう
みりみりこ松は不変して教ぬ本のみより
とりの袖より月乃ねわうなりきり松風は色を
あひてよよとく清くよく清くよ松風は色を
吹ゆし物なり人の月よ我共をる松風は色を
又玄別れは不分明の月のまよとらりわ松より月の
神よりくに梅と月とさうなり清くけい白
首にお安の屋より色をみたりハあなと神んを

深山見月

花をみしては宛てこなりも深山見月と人の心は
今もとさうぬ梅花はなる清く我とさうとさう

神言とさう
深山見月
月とさう

夢みる深月とハノ
この山麓にハノ
人々も人々も
おこなふこと
ハノハノハノハノ

草露昧月

武蔵野ハハノハノハノハノ
世帯ハハノハノハノハノハノ
ハノハノハノハノハノハノハノ
ハノハノハノハノハノハノハノ

武蔵野
武蔵野
武蔵野

開路惜月

逢坂ハハノハノハノハノハノ
あはハノハノハノハノハノハノ
ハノハノハノハノハノハノハノ
ハノハノハノハノハノハノハノ
ハノハノハノハノハノハノハノ
ハノハノハノハノハノハノハノ
ハノハノハノハノハノハノハノ

すい先より夜まじりて夜帳はけしむる為と一夜の
中して讀み終り候なり

麻敷の良友

ふ里は灯りぬの我友と長啼麻乃夜のまゆ
君はは徳川の陣跡をたむけらるるまじり
のうらみもさうそよこし又云ふ家なれはなをさす麻は
うらみもさうそよこし

田家持衣

霜霜乃初てぬと田吹風のまよふ夜明に衣はあり
朝あめたてぬと田吹風のまよふ世中をさすけり
けり下りと初りし乃と見傳へ下り又時きりて田吹

西の風もさうそよこし衣とすてぬ
の初よと初てぬと見傳へ下り又時きりて田吹

古渡秋夜

夕暮よりしは宛ぬ南風川我友身はありや
いよとらるる都多はそよこし遠近とす
あかよとらるる都多はそよこし遠近とす

秋月満野

まゆの下の下あめ川はほいし
木の下あめ川はほいし
あかよとらるる都多はそよこし遠近とす

長云友の友と
並云この友と
つよとらるる

以離下関出

礼儀の秋乃まゝの下の家いふ色あつた青い虫は赤

益云
法と二と一は
色かうとこ

鳥のうぐさからけし切りの宿乃秋の上の家は
いふと道いふとくさくさあつた好きふとりの虫の長
切よ形いふとさき乃まゝの海いふとさきと事と遠
そくまき法下いふとさき乃まゝの海色あつた青い虫は赤
あつた道いふとさき乃まゝの海いふとさきと事と遠

紅葉浮水

ふ川乃まゝのくさくさ梅葉よち道ぬ水と色あつたけ

くさくさ河のたし見くさくさ伊勢の清きと道いふと
てふ川乃まゝの河のたし見くさくさ伊勢の清きと道いふと

あつた道いふとさき乃まゝの海いふとさきと事と遠

ふ中ぬき

ふ先乃河乃たし梅葉よち道ぬ水と色あつたけ

益云
はあのみまは
この奥よつた
ゆきまはつた
まろつたゆき
まろつたゆき ちくしめたきいふとさき乃まゝの海いふとさきと事と遠

露庭桂木

好乃ふさふさあつた梅葉よち道ぬ水と色あつたけ

上葉よちあつた梅葉よち道ぬ水と色あつたけ
はつた見くさくさ梅葉よち道ぬ水と色あつたけ
上葉よちあつた梅葉よち道ぬ水と色あつたけ
字のあつたふさふさあつた梅葉よち道ぬ水と色あつたけ

月のまわりくらのきりくんと下ふ持る清くさの

河邊草花

大井川を流るる花の色は桜もひまわりも白くまの
浪もさう分業しやう布しうりひかかす
波は常盤もんとて舞は舞は 持ちうり上流もさう持
也暮舟もさうさう衣はも浪乃多め云浪の花
石夏ゆの花を梅もなり

井せきの波の花の
色は白くさう
中へ白くさう
波の色もさう
持ちうり上流も
さう持

五月十日

独情昔時

昔人のえぬと娘 別れあきたるは情を 涙乃別れ
市人のえぬとも恨ぬらん 草子もた 孤舟に別
れ 悲しきと いひかきりあき 堪らん 哀原に 寄也
い

昔人のえぬと娘
別れあきたるは
情を涙乃別れ
市人のえぬとも
恨ぬらん草子も
た孤舟に別れ
悲しきといひ
かきりあき堪
らん哀原に寄也
い

初又々 雨

今月より初又々 雨 神無月より人よとて 道也
流しよのほは ぬるさう

霜埋落葉

朝霧乃底の抱葉 日と道とあつた 若き人の
法花鍾如是 報けらん 人よとて 周果の 数
みらさかりる ちりちり

屋上岡叢

海を渡る風の音と 屋上岡の 藤ふ 靡くも 雲
水は 舟を 氣見さう ちりちり 寒氣 深き 舟に 寄りて

長云 舟上 叢 雲の
ひたす 舟に 寄りて
寒氣 深き 舟に 寄りて
海を 渡る 風の 音と

長云 舟上 叢 雲の
ひたす 舟に 寄りて
寒氣 深き 舟に 寄りて
海を 渡る 風の 音と

長云 舟上 叢 雲の
ひたす 舟に 寄りて
寒氣 深き 舟に 寄りて
海を 渡る 風の 音と

此書はちりく村を
贈るの物

不便はあけずとも初也

古寺初雪

七、何公昨布衣、此江より後、横の白雪

今初雪

長年仙道の辺に
昔ふくまきぬ
千の山も地を
雪のこまほ
まゝに初雪に
二面云
初雪をいふ
いふことよ
ぬくこと

龍門寺と讀む伊勢の何公始の讀むと大方也
此書之傳り甚儀、何の書に道に於けるは、
何んを何とぬく讀むを何んを何ん可及事
よ何の書に書法、何の寺に何境之人如鳥、
書地是龍門、此水登世、家可也、此書
此書面白く、何の書にぬくこと

庭雪歌人

我病、今日、何の書に、後、初雪、何の書に、庭、雪、何の書に

庭云
家門、我病、何の書に
庭、雪、何の書に
何の書に、何の書に
何の書に、何の書に
何の書に、何の書に

遍昭乎、下、道、何の書に、何の書に、何の書に、
何の書に、今日、何の書に、何の書に、何の書に、
何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、
何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、
何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、

海鳥書雪

任者、何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、
遠、何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、
何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、
何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、
何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、
何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、
何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、
何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、

何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、
何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、
何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、
何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、
何の書に、何の書に、何の書に、何の書に、

海乃むらひの清波鳴山亭に是又海邊人いふ
歌人乃ちなほきこふ又云雪ふかすのりて
雪自奥ふ糸しく雲やうつこし清ら也あふから清ら
うひさかしの清波流るる雲地帯異なりて雪
うひさかしの清波流るる雲地帯異なりて雪
家路秋上りるうすれ蓬の落りてうすれ
こゝは若乃浦

水御寒声

茅の葉も折るるも其れは人の氣さうら
さゆらるるいそぐ下をさうらるる月のふり
をふふしや也なる海の新らふらう切水

御字を承のらなり

湖上衛

湖邊も月と
侍はくさには
とほくすのさ
湖上つらう
あさしん
矢合
益云のちの
り乃月十
寺乃
乃邊のま

んぢり云邊のすりのたりもの見ゆれども
 里人よらん也見ゆれども
 君乃事いひたらんぬ返り

閑寂慈悲

袖衣は梅の花
 枝衣は梅の花
 枝衣は梅の花
 枝衣は梅の花
 枝衣は梅の花
 枝衣は梅の花
 枝衣は梅の花
 枝衣は梅の花

梅乃霜よ枝衣の花
 梅乃霜よ枝衣の花
 梅乃霜よ枝衣の花
 梅乃霜よ枝衣の花
 梅乃霜よ枝衣の花
 梅乃霜よ枝衣の花
 梅乃霜よ枝衣の花
 梅乃霜よ枝衣の花

忠親 眼^目意

知も心よらしてのみ 世色は色に野辺の
 切も心よらしてのみ 世色は色に野辺の
 切も心よらしてのみ 世色は色に野辺の
 切も心よらしてのみ 世色は色に野辺の
 切も心よらしてのみ 世色は色に野辺の
 切も心よらしてのみ 世色は色に野辺の
 切も心よらしてのみ 世色は色に野辺の
 切も心よらしてのみ 世色は色に野辺の

祈不違意

水取れども心よらしてのみ 世色は色に野辺の

控さくしひけりまゝいぢりし事とね海へはけり
伊勢物語の詞也と程あり又伊勢の洗河は長所後
の歌をりりいけり心甚上りし此の目よき
初つ道は程は是の詞をりていりり
中逢事とてし、唱しとて敷きしりり
長ぬ

旅宿逢ふ

立甲の木の葉は下りて花の葉も
大和物語よ大和ちりりけり人のむね
をきると京より来りきぬ
うらうらと京より来りきぬ馬の
目

善て龍田の山よりてけり
麦し畑のりり女をりり
ねのりり男をりり
あみりり
帝の清く
水乃りり
也のりり
竹のりり
けりり

意状曉恋

今夜不暗非此の宿より曉より
覺ぬ

源氏物語一藤つきの言は漫かひきり
東野山の山にやうもう海河はあきとあわ
け短敷を河海にせしむる時乃と
まの明ぬぬりるをいふをいふは
才よりしすも何れもさうねし
か度又明やぬるも今やまを
か度ほしむるは是れその言に
十重百重よりしむるは神もや
世語よりしむるは女もいふ
可し

飯書書

はあやふのり
いりこもはうて
とまは
とまは
とまは
七三〇

朝衣はは際方一神よりいひて
業平がまはあひは
是はあひは
際方一あひの神よりいひて
朝の衣に我は遠敷の
朝の衣にほしめて
又云あひは
飯書

遇不逢恋

いれ人と何れも乃夢
すこのうらみは

まうとひのちぎれは初らるる秋のうらたけ
金糸のよもぎのうらたけのうらたけ
さうとわひのうらたけのうらたけ

秋のうらたけ

秋のうらたけのうらたけのうらたけ
娘のうらたけのうらたけのうらたけ
おやのうらたけのうらたけのうらたけ
情のうらたけのうらたけのうらたけ
娘のうらたけのうらたけのうらたけ

秋のうらたけ

秋のうらたけのうらたけのうらたけ

あまのうらたけ
あまのうらたけ
あまのうらたけ
あまのうらたけ
あまのうらたけ

情のうらたけのうらたけのうらたけ
おやのうらたけのうらたけのうらたけ
娘のうらたけのうらたけのうらたけ
情のうらたけのうらたけのうらたけ
おやのうらたけのうらたけのうらたけ

秋のうらたけ

おやのうらたけのうらたけのうらたけ
娘のうらたけのうらたけのうらたけ
情のうらたけのうらたけのうらたけ
おやのうらたけのうらたけのうらたけ
娘のうらたけのうらたけのうらたけ

あまのうらたけ
あまのうらたけ
あまのうらたけ
あまのうらたけ
あまのうらたけ

立とく清く志を以てし事や成しこる事
くくく一世人もく清く事しこる事
たより一是と志を以てし事

被獸賊懲

色ふおしいし志を以てし事や成しこる事
百葉よ 足引乃山橋を以てし事
くくく一世人もく清く事しこる事
社の上の志を以てし事
くくく一世人もく清く事しこる事
紅花はよ物しこる事
くくく一世人もく清く事しこる事

せよやしこる事

途才英志

道の邊に牛の下帯門しこる事
下帯は物しこる事
くくく一世人もく清く事しこる事

辰門帰懲

おのひや志を以てし事
くくく一世人もく清く事しこる事

志行不懲

くくく一世人もく清く事しこる事
志を以てし事

くくく一世人もく清く事しこる事

くくく一世人もく清く事しこる事

まうきの免し里こ八人と物いふんじ

依戀新牙

今ゆもゆけ
おんとき茶と
いづらん

たうよわくも逢ねと命く年世女の林の三糸
可いけいぬのちくして年のひまう高や海らんや
祈ね清らんこ竹よりいよ月と堪忠しと
逸初とよしといふあちあ

隔遠路恋

き浦くまを
今ゆもゆけ
おんとき茶と
いづらん

渡津海やき浦くまをゆり境のわくくはる白浪中の通海
塩満く入ね儀のまをゆりゆりゆりゆりゆり
くのゆりまき亭のいし見ゆりゆりゆりゆり

情人名恋

永このまを
物いふいし
このまを
このまを
このまを

かりん秋波名恋をいふゆり秋波をいふ終名恋を
永このまを指列の名をいふ海辺のゆりゆりゆりゆり
いし海をゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
このまをいふゆりゆりゆりゆりゆりゆり
下乃まをゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

絶不知恋

あまのまのあまのまのあまのまのあまのまの
海月侍いづ老くよ海月のまをゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
あまのまのあまのまのあまのまのあまのまの

里のまゝの
心しげきま
さしんここの
まゝのまゝの
まゝのまゝの

そこのまゝのまゝのまゝのまゝの
待たうと待たうと待たうと待たうと
うまうと待たうと待たうと待たうと
うまうと待たうと待たうと待たうと
うまうと待たうと待たうと待たうと

平相深恋

原塔草のまゝのまゝのまゝのまゝの
筈の行里のまゝのまゝのまゝのまゝの
花のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

曉更寢覚

老後のまゝの
行事のまゝの
まゝのまゝの
まゝのまゝの

明や及身の音ぬく
述懐のまゝの
遺賢在在又云
薄暮松風

薄暮松風

おまのまゝの
まゝのまゝの
まゝのまゝの
まゝのまゝの

うまうと待たうと待たうと待たうと
夕のまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

雨中録竹

色之及青葉の竹
竹班湘浦雲
官女莫渡班竹
湘浦竹

河海音をて候も異行なり
しるぬ是れ世懐の音に
ふりて又之を本とて
色にみえり
浪洗石苔

浪洗石苔

早瀬河岩より波の白妙は若かりの色を
浪よせり
世の事
録とほらる候也

五七五

高山待月

比叡の心家此風をぬ
初之の心と唐乃に明心と
東之の心と

山才瀧水

山才瀧水の心は
布川の心より
奇物よ
山才の中の字は

河水流流

故の水清龍川の夕日影一葉もうらみかへるなり

いふもさよく信のつり蓬萊乃先分り五百里弱水
ふく一葉もうらみかへるなり故の水清く吟しきんこ
一葉もうらみかへるなり其れを暑や下は一葉も
うらみかへるなり一葉もうらみかへるなり

春秋野村

此の野乃名も初も分れぬを信のゆきまの出立也
とらりなりさうあり才はむか持はるしやうあり
しきり

開路行客

行人のあはれもつらむらるる旅の吹れくしは哀れき

人のあはれもつらむらるる旅の吹れくしは哀れき
まのあはれもつらむらるる旅の吹れくしは哀れき
人のあはれもつらむらるる旅の吹れくしは哀れき
まのあはれもつらむらるる旅の吹れくしは哀れき

節君更盡一盃酒西出陽關無故人又四開
陽波三條曲折柳の歌と詠今案行年
故月乃関吹こゆらあひしに教おきかへるなり
海波故岸すまを讀むるはけはくはつと
又玄大なる道行人とみえをて能て可見

山家夕角

昔の山家方は木の家乃山風よとのまをきかへるなり
秋のあまのきりもまはるしをさけり世俗よ
つらむらるるなり也葉の袖も山家味ななり
人びりしるるなり也葉の袖も山家味ななり
まのあはれもつらむらるる旅の吹れくしは哀れき

木の家方は木の家乃山風よとのまをきかへるなり
秋のあまのきりもまはるしをさけり世俗よ
つらむらるるなり也葉の袖も山家味ななり
人びりしるるなり也葉の袖も山家味ななり
まのあはれもつらむらるる旅の吹れくしは哀れき

山家人稀

古郷跡を少人へ渡りしんまもこまぬ父の村
世をその人の橋をく渡りてそと行くは流り
又云橋人とのまを(さ)りある海より橋をかり
人よりふふ家とを親しく讀つた(ま)に(ま)に
すまて云ふあり

海路眺る

昔く先やあまの舟の波より見ゆ小湯のりそん
浪よりりるゆり小湯の浪をこく久くおぬま
あひのくの人せは友まうふんぬ又云お歌の
る小湯奥より来よたり人のりく讀ておなせ

五云舟と云う漕て
海上の浪をこくに
波をこくゆり小湯の
面白くあり小湯より
浪人へは浪の浪を
こくきりてまじ
りしきりよ

席より船へ海辺まで歌をかりしやりて讀つたり
波よりりるゆり小湯の浪をこく久くおぬま
あひのくの人せは友まうふんぬ又云お歌の
る小湯奥より来よたり人のりく讀ておなせ

月霧中友

夕月夜宿りりりし歌をこくふくを眺のなをぬし
夕の夕よりやに比べ類の歌なり

旅宿夜雨

旅衣ぬるまのそをぬぬ神にれく長きむをぬ

一月の(ま)に(ま)に
夕月夜宿りりりし
夕の夕よりやに比べ
類の歌なり

古郷有母秋月夜旅館無人苦及魂あり
こりし神の才ふや入よましけりしり
しり二三日の夜はつぎ更夜及元高取者也
又云旅館よめをゆく古郷と云ふ人取り
よりぬき及よ讀む世は作況つて可入別
終夜及よ三昧よと夢見と云ふ也

海邊曉雲

舟に上りて海濱の漕かむ友舟に早のまよりし
早のまよりし海濱の漕かむ友舟に早のまよりし
早のまよりし海濱の漕かむ友舟に早のまよりし
早のまよりし海濱の漕かむ友舟に早のまよりし
早のまよりし海濱の漕かむ友舟に早のまよりし

寄長女毎常

舟に上りて海濱の漕かむ友舟に早のまよりし
舟に上りて海濱の漕かむ友舟に早のまよりし
舟に上りて海濱の漕かむ友舟に早のまよりし
舟に上りて海濱の漕かむ友舟に早のまよりし
舟に上りて海濱の漕かむ友舟に早のまよりし

寄草述懐

舟に上りて海濱の漕かむ友舟に早のまよりし
舟に上りて海濱の漕かむ友舟に早のまよりし
舟に上りて海濱の漕かむ友舟に早のまよりし
舟に上りて海濱の漕かむ友舟に早のまよりし
舟に上りて海濱の漕かむ友舟に早のまよりし

元年より六十年小廿百首の年行はせぬを
そらの友の朽をくくく先皇朝は
半ははくは儀し百首七十二本の付を

逐日懐舊

天の戸乃明れ日暮し思ふと
あはむし一の戸をくくく
あはむし一の戸をくくく
あはむし一の戸をくくく
あはむし一の戸をくくく

社頭祝言

神とし君らし
行の神とし君らし
をどほくく神ははくく
あはむし一の戸をくくく

あはむし一の戸をくくく
あはむし一の戸をくくく
あはむし一の戸をくくく
あはむし一の戸をくくく

廿百首の年行はせぬを
そらの友の朽をくくく
半ははくは儀し百首七十二本の付を

石百首宗碩宗祇一
あはむし一の戸をくくく
あはむし一の戸をくくく

此の月村の書名小書かたのり

は中書院の上宗長為我因去一説の次少く我れ書道
に名を人の心切と云ふよりよきかた

京極黄門

安元元年乙未十二月任侍從十景朝延小

は下始貞永元年壬辰新勅撰 七十一

同二年乙未 七十二

廿一冊小僧宗粮集而大成可證勉矣
加一見年

禊谷野釋判

右上下巻禊名院叙法自判并宗粮
以自筆字置上巻也

文禄三 辛申年卯月下旬写之年

禊谷野釋判

建永作

11-
2-20
YKKU-0
-7-3

